

児童虐待相談件数の増加の背景にあるもの

—育児不安の国際比較調査からさぐる—

開原久代 (東京成徳大学 子ども学部教授)

児童虐待統計のエビデンスに基づく 研究の不在

平成2年より、それまで養育困難の件数として処理されていた児童虐待件数が独立して計上されるようになったが、その件数は、児童虐待防止法が施行された平成12年前後から急カーブで増え続け、平成17年度の全国の児童相談所（以下児相）に寄せられた児童虐待相談件数は3万4472件に達した。また、平成16年10月の法改正により虐待相談を、区市町村も受けることになったため、全国の市町村が受理した虐待相談件数は平成17年度に3万8183件となり、児相との重複があるにせよ虐待の相談統計件数の増加はとどまることがない。それでも報告される件数は氷山の一角で、潜在的な児童虐待は死亡事件となっはじめて明るみに出るといふ悲しい事実がある。

米国やカナダでは児童虐待の政府統計への批判や、実質的件数の調査がなされ、米国では1990年代には報告件数の3分の1が実質的件数として報告されている⁽¹⁾⁽²⁾。Google上でも、法的定義にもとづく児童虐待の政府統計への疑問や、目的に合わせた別の虐待の定義の必要性が論議されている。

しかし、日本では、実質的件数、虐待の程度、予後の重いものと軽いものとの区別を専門的に検討するような調査研究はほとんどみられず、まして、政府統計への批判もない。児童虐待をめぐる話題といえば、虐待件数の年々の増大、児相職員の過重負担と増員要求、被虐待児を受け入れた児童福祉施設への費用加算、心のケア担当の心理職配置などの論議が中心となっている。そして虐待者である親対応の苦勞によるBurn outが訴えられ、児相職員の苦勞が強調される。Burn outについては、米国では虐待の仕事へのやりがいが高く感じている職員ではBurn outは少ないという研究⁽³⁾があるが、日本では児童虐待対応の現場の専門体制の吟味が進んでいない。

2006年9月、英国Yorkで開かれた第16回ISPCANの児童虐待の国際会議に参加したが、エビデンスに基づく精神保健活動のシンポジウム(Challenges in

Conducting Evidence Based Mental Health Practice with Abused Children)では、米国のDr.Benjamin Saundersが虐待の危機管理の研究より職員のBurn outの研究が先になっていること、英国のDr.Arnon Bentovimが母親の養育態度の調査が、質問紙を渡してポストに入れるだけとなっていることに苦言を呈していたが、どこの国も児童虐待のエビデンスに基づく研究体制づくりで苦勞していることが窺えた。

児相で受理した児童虐待相談の内容で特徴的なことは、主たる虐待者は常に母親が60%以上を占めていることである。虐待をする母親は、パートナーとの葛藤、生活上の困難、養育能力の低さ、精神障害などの問題を抱えていることが明らかであるが、虐待に関する情報過多から不安を高める母親も増え、「虐待しそう、子どもが可愛くない」という虐待相談が増え、全体の相談件数を引き上げている。

米国の統計でも、育児の主体者は母親またはそれに代わる女性であるため、虐待者の60%以上が女性という報告もある。今回、育児不安の国際比較調査を行ったので、その一部を紹介して虐待相談の実態を考えたい。

調査項目

「自分の子どもでも、かわいくないと感じた(1.とても感じた)」という回答群の姿

本研究は、深谷昌志代表による筆者を含む研究班の育児不安の国際比較調査研究⁽⁴⁾の一つであるが、質問紙調査の中の「子どもが可愛くない」(1.とても感じた)と答えた事例を分析することにより、日本の母親のきわだった育児不安の実態を明らかにした。

調査は、2006年1月から10月までの期間に、日本、中国(台北、天津)、韓国(ソウル)の小学1～2年生の母親と父親を対象に、育児不安に関する156項目の質問に無記名で回答してもらった。調査質問票は、学校から子どもに手渡し、学校で回収している。Dr.Bentovimの指摘にあったポストに入れるだけの調査ではなかったため、回収率は日本71.4%、台北92%、天津94.8%、ソウル99%であった。(表1)

研究方法は、今回は主に母親の育児不安に焦点をあて、156の質問項目の中から表2に示した質問項目に注目し、5の「自分の子どもでも、かわいくないと感じる」の4段階の回答①とても感じた②わりと感じた③あまり感じなかった④ぜんぜん感じなかったの中から、①を回答したものを対象群とし、②、③、④を回答したものを比較群とした。そして、対象群と比較群について、156の質問項目の回答の分布状態を、カイ2乗検定により比較し、対象群と比較群のきわだった差異をみるため、水準 $p < 0.025$ の項目を取り上げた。

質問票の全質問項目の掲載は省略したが、質問に対する回答は、4段階から6段階のカテゴリーに分けられ、①とても②わりと③あまり④ぜんぜんという4段階で回答するもの、主な養育者(①母、②父母、③祖父母、④祖父母の協力、⑤保育所、⑥その他)というような6段階で回答するものが含まれている。また、質問項目ごとのカイ2乗値と有意水準の記載は省略した。

表1に、日本(都心部と農山村部合計)、台北、天津、ソウルの回収された調査票数(1)、母親調査と父親調査の無回答票数(2、3)、母親調査の「自分の子どもがかわいくない、とても」という回答者数(対象群)(4)、父親調査の「かわいくない、とても」という回答者数

(7)、「かわいくない1とても、2わりと感じた」合計回答者数(5)、母親調査の「かわいくない とても」回答者(対象群)のパートナーの父親の調査への協力状況(6)を示した。

対象群に有意差がみられた質問内容

今回は母親調査を取り上げ、父親調査との比較は部分的に行っただけであるが、表1の(3)より、父親の無回答者が、日本と韓国が16~17%を占めているのが際立っている。しかし、中国の調査では、母親が代理で記入したと思われる部分回答の質問票が多く含まれていたため、日本と韓国の父親の非協力ぶりを断定することはひかえる。

対象群の占める割合は、いずれの地域でも全体の0.5~2.6%だが(表1の4)、対象群に「2わりと感じた」と回答したものを加えると日本の母親は全体の1割が該当し、際立っている(表1の5)。

一方、父親調査では「かわいくない とても」と回答した者は、日本は他の地域と比べて一番少なく(表1の7)、日本は育児の苦勞を母親が背負い、父親は楽をしていることが窺える。また、対象群のパートナー

■表1：育児不安・母親・父親調査質問票の回答状況 質問項目 / 「お子さんが2~3歳くらいまでに次のようなことをどのくらい感じましたか。」「自分の子どもでも、かわいくないと感じた」(1.とても感じた 2.わりと感じた 3.あまり感じなかった 4.ぜんぜん感じなかった)の回答者の状況

	日本	台北	天津	韓国(ソウル)
(1) 回収された調査票数(回収率)	1718(71.4%)	1246(92.0%)	496(94.8%)	373(99.0%)
(2) 母親調査の無回答票数	25(1.5%)	28(2.2%)	6(1.2%)	9(2.4%)
(3) 父親調査の無回答票数	275(16%)	94(7.5%)	20(4.0%)	66(17.7%)
(4) 母親調査 1. とても感じた 回答者数(対象群)	17(1%)	8(0.6%)	13(2.6%)	2(0.5%)
(5) 同、1. とても感じた2. わりと感じた 回答者数	178(10.4%)	56(4.5%)	40(8.1%)	26(7.0%)
(6) 4. の回答者の父親回答者数(調査協力者数)	6(35%)	8(100%)	12(92%)	1(50%)
(7) 父親調査 1. とても感じた 回答者数	5(0.4%)	9(0.8%)	21(5.2%)	4(1.3%)

■表2：質問項目と対象群・比較群の抽出 質問 / 「お子さんが、2~3歳くらいまでに次のようなことをどのくらい感じましたか。あてはまる場所に○をつけてください。

	とても感じた	わりと感じた	あまり感じなかった	ぜんぜん感じなかった
1 毎日の育児の連続でぐたくたに疲れる。				
2 子どものことを考えるのが面倒になる。				
3 子どもがうまく育たないのではないかと不安に思う。				
4 子どもが汚したり、散らかしたりするので嫌になる。				
5 自分の子どもでも、かわいくないと感じる。	対象群		比較群	
6 自分は母親に向いていないと思う。				
7 子どもが煩わしくてイライラする。				
8 社会的に孤立しているように感じる。				
9 他の子どもと比べ、発達の遅れが気になる。				
10 外で働いている夫がうらやましい。				
11 勤めに出ているときが天国だ				

■表3：質問項目「自分の子どもでも、かわいくないと感じた」「1. とても感じた」対象群と「2. わりと感じた」「3. あまり感じなかった」「4. ぜんぜん感じなかった」比較群の有意差のある項目数(調査質問票は、日本、台北、韓国は同じ質問票が使用されたが、天津は改定前の質問票を使用したため、共通の質問項目は99となっている。有意差のある質問内容は本文に記載)

	日本	台北	天津	韓国
質問項目数	156	156	99	156
$p < 0.025$ の有意差を示した質問項目数	61	33	17	19
①日本・台北・天津・韓国で共通の項目	4	4	4	4
②日本・台北・天津で共通の項目	5	5	5	
③日本・台北・韓国で共通の項目	2	2		2
④日本・台北で共通の項目	9	9		
⑤日本・天津で共通の項目	3		3	
⑥日本、韓国で共通の項目	8			8
⑦日本のみ有意	30			
⑧台北のみ有意		13		
⑨天津のみ有意			5	
⑩韓国のみ有意				4

■表4：父親調査質問項目の中の「お子さんが3歳くらいになるまで自分の子どもでも、かわいくないと(①とても感じた)」回答者(表1の7参照)を対象群とした有意差($p < 0.025$)質問項目数 日本のみ

父親質問項目数(母親調査と一部のみ共通)	156
$p < 0.025$ の有意差を示した質問項目数	19
父親対象群5例の母親の回答状況(自分の子どもでもかわいくないと感じたか)	2) わりと感じた 1例、3) あまり感じなかった 2例、4) ぜんぜん感じなかった 2例

である父親の回答率が台北は100%であるのに対して日本は35%で、父親不在の家庭が多いことも窺われた。一方、天津では、「かわいくない」とても」という回答者は父親が母親の2倍となっているが、育児不安に関する地域別の検討はここでは割愛する。

表3より、対象群は、特定の質問項目で、比較群と有意に異なる(p<0.025)特徴が示されたが、国際比較の上では、日本の対象群の有意項目数は台北、天津、韓国の倍以上となっている。

以下、表3に示された順序で、有意差が示された質問項目を取り上げる。

①日本、台北、天津、韓国で共通の質問項目。

○お子さんが、2～3歳くらいまでに（子どもが汚したり、散らかしたりするので嫌になる）（自分は母親に向いていないと思う）（子どもが煩わしくてイライラする）。

②韓国以外で共通の質問項目。

○お子さんが、2～3歳くらいまでに（毎日の育児の連続でぐたぐたに疲れる）（子どものことを考えるのが面倒になる）（子どもがうまく育たないのではないかと不安）（外で働いている夫がうらやましい）（勤めに出ているときが天国）。

③日本、台北、韓国で共通の質問項目。天津の質問票には以下の質問項目はなかった。

○お子さんが2～3歳の頃、（あなたなんか生まれてこなければよかったと叱った）

○親となったことは、あなたの人としての成長にとってプラスだと思うか。

④日本と台北で共通の質問項目。

○あなたは妊娠がわかったとき、母親になるという実感をもったか。

○あなたは、お子さんが2～3歳の頃（寝ている子どもを一人だけ部屋に残して、買い物にでかけた）。

○あなたは（結婚する前）に自分は子どもを好きだと思っていたか。

○あなたにとってお子さんは（とにかくかわいい）（自分にとって宝物）の存在か。

○全体として考えたとき、あなたにとって、これまでの子育ては楽しかったか。

○あなたの幸せ感は、（結婚した頃）とどのように変ったか。

○あなたの幸せ感は（一番上のお子さんが高校を出る頃）にどう変っていくか。

○子育てについてのいろいろな意見で（現在の日本〈台北〉では、子育てをすると損をする）と思うか。

⑤日本と天津で共通の質問項目。

○あなたは（初めて授乳したとき）、母親になるという実感を持ったか。

○一番上のお子さんの子育てについて6ヶ月くらいまで（母乳やミルクをあげる）（オムツの取替え）で苦労したか。

⑥日本と韓国で共通の質問項目。

○一番上のお子さんの妊娠を聞かされたとき、嬉しかったか。

○あなたは、（子どもが話せるようになったとき）、母親になるという実感を持ったか。

○一番上のお子さんの子育てについて6ヶ月から1歳半ごろまで（トイレトレーニング）で苦労したか。

○あなたは、お子さんが2～3歳頃、子どもを生まなければよかったと思ったことがあったか。

○現在のお子さんについて、（わがまま）がどれくらいあるか。

○あなたは、この調査票を持ち帰ったお子さんに将来できれば、どの

学校段階まで進学してほしいと思うか（高校、専門学校、普通大学、一流大学、大学院）。

○あなたの幸せ感は、今までにどう変ったか（一番上の子が3歳の頃）。

○一番上のお子さんが3歳まで、お子さんの母方祖父母はどこに住んでいたか。

⑦日本のみが有意差を示した質問項目。

○あなたは（産声を聞いたとき）、（初めて子どもを抱いたとき）母親になるという実感を持ったか。

○一番上のお子さんが生まれてから（3ヶ月頃）（6ヶ月頃）（1歳頃）（2歳頃）（3歳頃）子育ては大変だったか。

○お子さんが幼い頃、（寝かしつけるとき、添い寝）をしたか。

○あなたは、お子さんが2～3歳の頃（泣いている子どもを泣き止むまで放っておいた）○あなたにとってお子さんは、（夫婦をつなぐ絆）（悩みの種）（生きてゆく支え）。

○現在、あなたのお子さんは、うまく育っているか（体力面）（性格面）。

○あなたと（お子さんとの関係）（夫の親との関係）はうまくいっているか。

○この調査票を持ち帰ったお子さんが大人になって（よい親になれる）（幸せな家庭を作る）（社会的地位の高い仕事に就く）（仕事で成功する）と思うか。

○あなたの幸せ感は（一番上の子が生まれた頃）（一番上の子が小学校入学の頃）（現在）どのように変ったか。

○あなたは同じ世代の母親と比べて、（洗濯や掃除が好き）だと思うか。

○あなたはご自分の性格を（我慢強い）（責任感が強い）（楽天的）と思うか。

○子育てについてのいろいろな意見（自分の子を愛せない女性はおかしい）（幼い子を保育所に預けるのは心配だ）と思うか。

○あなたが育ったご家庭は（親は子どもをかわいがった）か。

⑧～⑩については日本が含まれていないので有意差を示した質問項目の説明は割愛する。

調査から読み取れる児童虐待のハイリスク要因と、虐待予防のあり方

本研究は、小1～2年の子どもの母親と父親を対象とした「うしろ向き調査」であるが、乳幼児期の育児の記憶もまだ新しく、学校を通して配布、無記名厳密封回収された調査によるもので、無回答票を含め回収率も高く、エビデンスに迫った調査といえる。

日本と韓国の母親調査の対象群の原データをみると、家族や夫に関する質問項目に無回答のものが多く、父親不在が疑われていたが、表1の6の父親調査の回答者が日本では35%ということでも裏付けられている。このことから「子どもが可愛くないと①とても感じる」という対象群には、結婚、出産のスタートから問題をかかえていることが窺え、虐待予備軍の姿が示された。質問項目には、明らかな身体的虐待や性的虐待に関する質問はないが、ネグレクト、心理的虐待に関する質問は含まれており、対象群にはいずれの地域でも有意差がみられている。

以下に興味ある所見を取り上げてみる。

1. 「子どもが可愛くない」という質問に「①とても感じた」と堂々と回答することは、国民性による相違が考えられたが、他の質問への回答状況などからその重みを推定した。表1のように、天津の母親、父親調査の回答比率が一番高くなっているが、全体的なデータの所見からは、天津の対象群は他に比べて特に深刻な育児不安を示す所見が少ないので、その国際比較については別の機会に検討したい。

2. 表3より、4地域共通に対象群で際立っていた項目は、子どもが2～3歳の頃、「子どもが散らかすので嫌になる、煩わしくてイライラする、自分は母親にむいていない」、表3の②では韓国が抜けているが「育児の連続でくたくたに疲れる、子どものことを考えるのも面倒で、子どもがうまく育たないのではと不安、育児と離れている夫がうらやましいし、自分も勤めに出ているときが天国」、表3の③では天津調査では質問項目がないが、他の3地域で「2～3歳の子どもに対してあなたなんて生まれてこなければよかったと叱り、親となることは人間的にプラスだなんてとんでもない」という育児の疲れと嫌悪をむきだしにしている。こうした思いは十分了解できる内容であるが、対象群と比較群の間には明らかな有意差が示されている。日本のみであるが、父親調査では、むしろ家事、育児の手伝いと仕事の板ばさみで疲れきったまじめな父親が同じ訴えをしていることが有意に示された。

3. 日本と台北の対象群では、共通の質問で有意差のあるものが9項目あったが、同じ項目が天津では有意差が示されないことから、天津の対象群は他と異質であることが窺われた。日本と台北の対象群は「妊娠がわかった時、母親になるという実感がなかった、2～3歳の頃、寝ている子どもを一人にして買い物に出かけることはしなかった、結婚する前から子ども好きでなかった、子どもはとにかくかわいいとか宝物だと思えない、子育ては楽しかったなんてとてもいえない、結婚した頃もそれほど幸せでなかったし、子どもが高校を出る頃も幸せになるとも考えられない、この国では子育てをすると損をすると思う」という否定的な意見が有意となっているが、子どもを一人にして外出しないという育児に対しての生真面目な姿勢が対象群に共通にみられた。

いずれの地域でも乳児期の育児の苦痛が共通に示されているが、中国に比べて日本は特に、育児への不安が高いことが明らかになり、日本は、育児の苦労を母親が背負い、父親や実家の協力がいない場合は虐待へのハイリスクが窺われた。日本のみが、対象群に際立つ

た有意差項目が多いこと、「①とても」に「②わりと」(表1の5)を加えると1割以上の日本の母親は自分の子どもをかわいくないと感じたことがあるという結果が示された。一方、父親たちでは、「①とても」の回答者は0.4%(表1の7)の比率で、他の地域と比べて少なく、この群の父親は育児、家事のよき協力者で母親を支えていることが明らかにされ、父親に不安が高い場合は母親の不安が低いことが示された。(表4)

日本では、子どもの虐待者の6割が母親と言われ、その母親たちはパートナーとの問題、経済的問題、精神障害などを抱えていることが明らかにされている。本研究では、家族の問題などを質問するのではなく、母親の育児に関する苦労を調査することにより、育児の現場での虐待のハイリスク要因をさぐった。

日本では、児童虐待対策のモデルを欧米モデルに求めているが、多民族の流入、子どもの人身売買、貧困の問題を抱えた国の虐待対策とは異なる課題があると考えられる。また、児童虐待の相談件数の増加を訴え、児相や施設職員は疲労困憊していることが強調されているが、その支援を論議する前に、日本の母親たちの抱える子育て不安による疲労困憊と虐待へのハイリスク要因に目を向け、その支援体制を考えることが急務ではないか。

今回のデータ分析の結果は、筆者の長年の臨床経験からも裏付けられることが多かった。

母親による虐待が過度に報道されるため、日本の母親たちが不安を高めている心配もある。少数であっても、対象群が示した育児不安を支える育児支援の体制を考えるべきで、単に虐待しそうだと言った不安を訴える母親のカウンセリングをもって虐待を予防しているという意識には危険を感じる。

《参考文献》

(1) Leventhal, J.M.; Overview of Child Maltreatment, In A.P.Giardino& R.Alexander(Eds.),Child Maltreatment,3rd ed. G.W.Medical Publishing,Inc.2005 1-11
 (2) Runyan,D.K.,Cox,C.E.,Dubowitz,H. et.al.: Describing maltreatment:Do child protective service reports and research definitions agree? Child Abuse & Neglect 29(2005)461-477
 (3) Conrad,C.,Kellar-Guenther,Y.;Compassion fatigue,burnout,and compassion satisfaction among Colorado child protection workers Child Abuse & Neglect 30(2006)1071-1080
 (4) 深谷昌志(代表), 育児不安の構造に関する国際比較研究(中間報告) 文部科学省科学研究費研究(B) 課題番号 17300231, 東京成徳大学子ども学部紀要 Vol.6,2007年3月
 (5) 開原久代, 第2章, 第3節, 虐待のハイリスク要因をさぐる 育児不安の国際比較, 深谷昌志編, 学文社, 2008年5月, 115-125
 (6) 深谷昌志(代表), 育児不安の構造に関する研究, 東京成徳大学子ども学部紀要 Vol.7,2008年6月刊行予定